
ト田舎鎮魂歌

勝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ド田舎鎮魂歌

【Nコード】

N5977S

【作者名】

勝

【あらすじ】

俺は倉井 亮太。このド田舎で様々な事件が起こる。

…情報？一個200円で！！

ROUTH 壱号線

ここはとある田舎。

それも「ド」がつくほどの…

商店街の活気もなく、田んぼが並ぶ。

町にあるのはコンビニエンスストアが4件、小さなスーパーが2件。元々は3件だった結果不況が原因の倒産。

ROUTH 1???号に直結している県道6??。

ここにはたくさんの車が通る。

国道の到着が都会ということもあり、様々な車が行き来する。

少子高齢社会…

この言葉がすっぱり入るかのように毎年行われていた地区の子ども行事の年々、その数を減らしている。

子どももほとんどいない。

学校と言えるのも中高一貫教育が推進されているが地元の高校へ行くのは正直落ちたものばかり。

ほとんどここよりも都会の高校へとさまようのだ。

4月

出会いだとか別れだとか正直興味がない。

毎年風景は変わってもやることは変わらない。

卒業式、入学式。

既に在校してる俺には…

俺は倉井 亮太。

目は若干死んでいる。

部活は文科系。

勉強も運動もそこそこ。

唯一の特技は「パルクール」という技術だ。

スポーツ、芸術、移動手段。

様々な用途に使われるその技術。

日本の忍者のようにも見えると外国では言われている。

二階から飛び降りたり、フェンスをなんなく越えたりと危険を伴いながらも最適、最短の道を走る。

彼はいざと言うときのためか、そのような技術や武器を持ち合わせているのだ。

さて…

I p i dから曲が流れている中、彼は自転車を引きながら帰路についていた。

部活もなく、いつのとは少し違う通学路とは違う道を通ってきている。

そこは夜になっても電灯の一つもつかず、その上山を無理に切って作ったのか道もがたがたで荒い。

普段通る者も多くない。

その大きな山に入る前塗装のかかったガードレールで一時停止。

そこは町が一望できるような場所。

<…楽しみだ>

”異端の情報管理職”とも言える彼は今日もその顔面をゆがめた。

”情報専門売買収集者”

彼に依頼するものはそう呼ぶか「クロー・リラ」と呼ぶ。

学校で大きな情報網として生徒会、大きな派閥からは重宝される存在。

しかし、顔を知るものはおらず、ただクロー・リラという名前だけが生徒の記憶に刻まれている。

そして異端者の手元には一機の携帯。

BOO、BOO

ストラップをつまみもちして、発信者の名前を確認する。

” タイナカ ケイスケ ”

「もしもし。クロー・リラです」

「…倉井、冗談は止せ」

「…何のようだ？」

#

ROUTH 式号線

4月！！といえば健康診断の多い時期。

歯科検診、眼科検診。

そして校医検診もその一つ。

しかし、今、学校では一つの噂で持ちきりだった。

”学校辻きり魔”

教師も教育委員会も頭を悩ませている出来事。

生徒の中にも被害があったとか：

被害的には首や手首に2、3本の筋が入るぐらいの浅い事件。

だが、誰しもが犯人を見ておらず、犯人があまりにも神出鬼没ということから生徒が犯人か外部の人間が犯人か：

生徒の一部はそれを賭けに使っているとか。

% & \$ ()

昨日の電話の会話。

「それで何の用だ？タイナカ」

「実は例の辻きりに関することなんだが」

「ああ・・・あれか」

「…辻きりの出るポイントが発見されたんだよ…」
「ポイント？」

「ああ・・・二階中央渡り廊下の真下、一回別館移動廊下の到着地点にて無数の血痕が出た。」

「浅い傷に無数の血痕てのわ…」

「だろ？」

「.....」

プツッ…プツッぷー

一階別館移動廊下付近

「…怪しいのはなんもねえけどなあ…」

校医検診は保健室での実施。

しかし、全校生徒が100もない田舎中学のため保健室から出た
ころには並んで待っているものはいない。

帰るべき教室のは行かず、こうして廊下に出てきているのだ。

別館に移る瞬間

グサリ

衝撃

まだ寝ている神経も

全ておきる

そのコロには頭は

真っ白

するとポタリ

赤い何かが

一滴

二滴

五滴

百滴

千

が全身を

激痛

覆った。

痛い

痛い

痛い

…いやそれにしては浅い。

”クライ リヨウタ ヲ 殺レ”

目の前の紙には確かに自分の名前と顔写真。

狙いは俺か…

…保健室に行くのはまずい。

かと言って教室へ向かうつてのもなあ

今は先に検診受けた女子だけか。

男子は多分着替えか？

…教室へ逃げ込むか。

二階 倉井 亮太の教室。

ガララ

誰が帰ってきたのか

疑問に満ちた無表情な目線がいきなり突き刺さる。

だが、帰ってきた人間を見て、目の色が完全に変わっていた。口を手で押さえるもの、目をふさぐ者。

そこに立っているのは血まみれのクラスメートなのだから。

「クソ！！あいつは次あったら殺す！！」

傷を裁縫セットの糸などで縫い合わせ、地べたに座ったまま、彼は叫んだ。

別館への移動と言うのは先生方のすることで生徒に用などない。強いて言えば、先生探し程度。

普段は立ち入り禁止という看板まで立てられている。

まさか、標的が俺とはな・・・

少し整理がついたのか、彼は心の中で悩んだ。

幸い制服がやられず証拠の隠滅は簡単。

しかし、犯人が彼を殺せなかったのは事実。

恐らく犯人も気がついていると見ていた。

・・・

探して殺すだけだ

ROUTE 参号線

小さな田舎には既に”例の事件”は回っていた。
学校辻きり魔。

狙われたのは倉井 亮太。

しかし、そんな中でも不良は問わず自分の奴隷に指示をする。

「おい！！俺のアンパンはどうした？」

泥だらけで口から血を出しながら罵声を浴びているのは先日の校医
検診の帰り、寄り道した結果

怪我を負った倉井。

「すみません」

彼は本当のところ”ただのいじめられっこ”

この不良たちのクロー・リラという人間を知っているようなのだが…
自分達の奴隷がまさかその人間であるとは知るよしもなかった。

傷のほうは既に”自分で抜糸”までしており、ほとんど完治している状態。

「…もういい。失せろ」

倉井 亮太の教室。

「倉井！」

「はい」

先月のテストがやはり忘れたところに帰ってきた。

少し出来のよい自分のテストを眺めながら、最も後ろにある自分の
席に戻ろうとする。

が、

スツと白いものが倉井の足元に出る。

勿論彼はそれに気が付かない。

ドシン

一枚の答案用紙が一度舞い上がり、その頃には全員が大笑いをして
いる。

その答案用紙はそのまま下でこけている倉井の頭の上に…

「ハハハハ！！」

「まじウケル」

「うわっださ！」

痛烈な言葉がやってくる。

しかし、何事もなかったように彼は席についていた。

放課後

「一緒に帰ろうぜ」

などといった言葉が周囲に聞こえる。

倉井はいつもどおり一人で帰ることに…

「傷はどうだ？」

電話に相手は先日同様タイナカという男。

「絶好調だ」

倉井の裏の顔はそう答えた。

「…そろそろ回り始めたな」

「ああ…お前が斬られて”大怪我”だなんて大げさに」

「大袈裟か…」

「……」

「だが、ヤルのは俺だ」

「好きにしろ」

ROUTE ? 号線

「例の別館、完全に封鎖なんだって」

「本当か!？」

倉井 亮太の刺された別館付近は完全に封鎖されていた。

先生連中も3人以上の隊列を組んで入るといふことになるという始末。

もはや今回の事件は町全体を不安に陥れていた。

深夜 0時 別館付近

「おい…本当にいいのかよ？」

「いいんだよ…ナイフに懐中電灯。夜は主電源が落ちる学校だから必要だろ？俺達で犯人捕まえてお手柄と行こうじゃないの？」

「…よし！やるか!!」

深夜になり、その上場所は別館付近。

まさしく悪条件に悪条件が重なり合ったような状態。

だが、そこには別の影がいた。

グサリ

と同時に地面には懐中電灯と刃の出たカッターナイフが落ちる。さらに落ちるのはそれらだけではなく、無数の血が地に落ちた。

別の影が犯人の影に取り掛かる。

「ぐお!!何をする」

<この声は!!！>

頭から被っていたフードを脱がすと眼前には先日倉井をいじめてい

た不良少年。

「てめえ」

そして影同士は気が付く、お互い苛めっ子、苛めれっ子であるということに…

「ちい！！」

顔を見られたことが悪かったのか…

不良少年 藤田 健は俊敏に夜の学校へ消えた。

ROUTE 伍号線

結果夜の学校への侵入した二人は他の町にある国立の病院へと搬送された。

俺も大きな収穫があつたといえる。

…タイナカに報告しておくか…

「えー今日の欠席は…藤田か？」

昨夜の事件のこともあり、学校はいつになく騒然としていた。

大きな被害者は俺も含め、3人目。

他の生徒も被害を食らうのでは？という親や地域の人間達からは不安の声が来る。

どうやら、その対処にも時間がかかるようで先生達の顔もどこか深刻そうと思われる。

藤田のほうはどう考えても顔を見られたからだろう。

俺が撒くのでは？という不安があることだし…

又、夜に侵入すれば…

「う…うわあああ！！」

一人の男子生徒が廊下で叫んだ。

授業はとつくに始まつており、先生達ももうそれぞれの教室でそれぞれの教科を教えている。

そういえば空席があるな…

あれは確か…タイナカ！？

タイナカ ケイスケは倉井の唯一無二の親友であり、クロー・リラの正体を知る人物。

先刻の休み時間にトイレへと向かったまま、帰ってこなかった。

「タイナカ!？」

「くう…」

蹲るタイナカの周辺には血痕。

そして黒い制服は斬られており、真っ赤なものが絶えず出ている。

「…バタフライナイフ?…藤田か?」

今回はあわてていたのか周辺に凶器として使われたと思えるバタフライナイフが転がっていた。

タツタツタツタ

生徒の面影は全く無い廊下を一人の生徒が走りぬける。

そして、生徒の向かった場所は別館付近の渡り廊下。

「…生きていたのか?」

「知ってたんだろ? あれぐらいでは死なないってことぐらい…」

「お前。えらく雰囲気が違うな…それが本性か?」

「まあな…俺はいつもどおりのつもりなんだが…」

「嘘つくな。顔に血管浮き出てんぞ?」

藤田に言われたとおり倉井の顔には血管が浮かび上がっている。

お互いはそれぞれの持ち合わせるナイフを取り出した。

片方はバタフライナイフ。

もう片方はクラフトナイフ。

「…タイナカ斬った奴以外はクラフトナイフが限界か?」

タイナカを斬りつけたバタフライナイフとは違うナイフをちらつかせる倉井。

そして、なんとなく格好つけたのか…

いきなり上の学ランを脱ぐ。

下には真っ白なカッターシャツが姿を現し、袖は捲つてある。

お互いの顔はゆがんでいる。

だが、一瞬にして、それは鬼のように変わった。

突きで先手を出たのは藤田。

それは綺麗によける倉井。

しかし、藤田は避けられた直後、クラフトナイフを右手のスナップだけで投げつける。

ドスリ

そのナイフは真っ直ぐ倉井の腕に直撃。

「あぐう……」

それを引っこ抜き、吹き出ている血をお構いなしに藤田を切りつける。

水平に振られたクラフトナイフは藤田のカッターシャツを掠める。

しかし、スライディングをいきなり、決め込みそのまま、転倒する

倉井。

「ちい……」

「……お前のバタフライナイフは貰ったぜ！」

どうやら藤田の狙いは先ほどの投げ技によって落ちた倉井のバタフライナイフ。

初めとは真逆の状態。

血がばたたと床に落ちる。

倉井は左手にナイフを持ち替え、地面を蹴る。

カキン！！ビリビリ……

倉井のナイフを同じくナイフで受け止める藤田。

勝ったのは藤田。

弾かれた衝撃で床に転がる倉井に容赦なく、近寄る藤田。

倉井は横に一回転。

一秒前に倉井がいた場所にはバタフライナイフ。

藤田が顔を上げる。

しかし、そこには誰もいない。

「どこだ?!…上か!？」

藤田の上にはいつの間にか跳躍していた倉井の姿。

ドスリ

藤田のカッターシャツに一本のバタフライナイフが突き刺さる。
先刻タイナカを斬ったものだ。

「俺の奴か？」

膝をついて、成り行きで倒れる藤田に倉井は告げる。

「…恨みは返したからな?お相子だよ」

そっぴい残し倉井は去っていく。

しかし、そこには彼等以外の影がいた。

「…倉井君つてすつごいね?惚れたかも…」

「…私は関係ないわ?」

「でも幼馴染なんでしょ?」

「そ…それだけだつて」

ROUTH ? 号線

タイナ力はその後藤田と共に緊急搬送された。

藤田は退院すれば、事情聴取、容疑が固まり次第、逮捕、少年院行ネンショウき。

とりあえず学校過ぎり魔の事件は終幕を迎えたのである。

しかし、倉井には少々事件が起きていた。

「ね…ねえねえ倉井君？これ、お弁当」

今日は例の事件等で授業が減り、事件の終幕を知らない給食の調理員が次々に辞職という二次災害が起こり、ここ一週間は給食の停止ほとんどの生徒が弁当を持参している。

「え…えつと、そのありがと…いただくよ…」

あの闘いを見られていたことを倉井は知らなかったため口調はいつもの通りで話している。

…しかし、お弁当は最悪ともいえるほど不味い。
どこことなく辛い。

吐き気がしてきた。

悪夢とも言える昼休みを終え、倉井は二階にある図書室へ向かう。

中は20人近い生徒がまじめに童話を読むものもいれば、マンガを見ながら笑う人間。

しゃべっている人もいれば、鬼ごっこをしている人間もいる。

「えつと…ノーベル化学賞の本わつと…」

しかし、倉井は誰もいない一番奥のほうに向かって、科学の分野の本を手を取った。

「ニトログリセリンかあ…硫酸と硝酸なんて理科室にあるものなのか？」

「あつれえ？倉井君！」

そこに現れたのは地獄の調理人・原 恵子。

<おいおい…丸分かりだっつの…>

場所も場所ということもあり、明らかに後をつけてきたと思われる。
「ねえ？この後時間ある？」

放課後

田舎とは言え、全く店がないというわけではない。

孤児で親戚に預けられている身である倉井は今日も買い食いにやってきていた。

上村酒店

「上村さん。ちわつす…」

「あれ？亮太。今日は人連れか？」

確かにいつも一人でやってくる倉井の後ろには一人の女がいる。

「…それは置いといて…そっぴや最近ここボヤ騒ぎなかつたすか？」
様々な場所に協力者を持ち合わせている異端の情報屋クロー・リラは早速情報の催促に回った。

「…しゃあねえなあ。タダにしといてやる」

「あざつす」

「最近は黄天の野郎の別荘の一部が焼かれたとかなんとか…」

黄天とは武器会社”黄天弾幕社”のこと。

正確には社長一家は黄天というえらく珍しい苗字なのである。

ROUTH ? 号線

「ねえ… 倉井君はメイの事どう思ってるの？」

先刻上村の店で購入したお菓子を口に頬張りながら恵子は口にした。そしてメイとは村田　メイ。

倉井の幼馴染で彼の片思いの相手。

「ど… どうって…」

片思いとあって、少し戸惑いと見せる倉井。

「でもさあ… あんな色気ない女より断然あたしのほうが良いよねえ？」

「…」

「え？ ちよつと無視？」

明らかにブリッ子といえる発言。

しかし、メイの事を言われ、その言葉に全く気が付かない倉井。

「… あつれえ？ もしかしてメイの事好きなの？」

「ち・・違う！！」

「はい！ 今日のお弁当」

… うげえ

「じゃ… じゃあいただきます」

相変わらず不味い。

今日はどこことなく苦い。

めまいがする。

「ねえメイ？ 彼のことどう思っ？」

「え？ どうも」

「ホントに？」

机を向かい合わせにして昼食を取る恵子とメイ。

放課後

「補習かよ…宿題やってくるべきだったな…」

昨夜の宿題をすっかり忘れていた倉井は補習。

しかし、彼以外にも誰かが席に座っていた。

「うげ！メイ！？お前優等生なのに補習？」

「私だつてたまには補習になるわよ」

どことなくツンとしているメイと共に補習を受けることにした。

カタン

白いシャープペンシルが床に音をたてて落ちる。

「あっ」

倉井は拾いあげ様と体を屈めた。

コツン

「「痛っ」」

「…あ」

「あ」

メイもシャープペンを拾おうと身を屈めたのだ。

「…あの…その御免。てか…な…何もないわ」

「いや…てかなんじゃそら」

お互いどことなう顔を赤らめている。

「…へえ、メイも倉井君も丸分かりじゃん。あーあ折角のターゲットだったのに。まいつか」

ROUTH ? 号線

ピンポーン

家のチャイムが鳴り響く。

親戚は今日も帰りが遅い。

パジャマ姿の少年は玄関に向かう。

「はぁーい」

「…こんばんわ。クロー・リラ君」

「黄天さん」

現れたのは武器会社の社長 黄天^{おうてん} 綾時^{あやとき}。

「実は君宛にこれをとね」

ダンボールに包まれた小包。

「まあプラモデルのようなものだ。明日必要になるかも知れん…これを使え。でわ、夜分遅くにお邪魔したね…」

綾時はそのまま夜の田舎を歩いていった。

「プラモデル？」

ガサガサと小包を開けると、バラバラになっている黒い部品の数々。しかし、ある部品を見て、この品が単なるプラモデルではないと気づく。

「これ、拳銃のトリガーじゃん」

「一応持参したけど…」

朝倉庫に入れてある自転車に跨り倉井は腰のホルスターに目をやった。

何に必要なのか気になるがいつもどおり学校に自転車を走らせる。

パン

パン パン

乾いた音が農道に響き渡る。

それはキリキリと音のなる前輪のタイヤの周りに撃ち込まれる。

「ち！だから必要ってか？」

さらにスピードを上げる自転車。

パン パン パン

一定のリズムを刻みながら今度は自転車の後輪を襲う。

後ろに括りつけられた学生靴を乗せながら自転車は山に回転しながら激突する。

パン パン パン

キュン キュン

パン

キュン

パンパンパン

キュンキュン

乾いた音と弾く音が交互に響く。

「学校まで走るか」

パン パン

銃声が少し減る、撃たなくなった倉井は黄天に貰った銃のサプレッサーを取り付け、2k先に存在する我が校目指して走り始める。

キンコーンカーンコーン

始業の音が校内に響き渡る。

「珍しいな倉井が欠席か？誰か聞いている者おらんか？」

先生が教室を見渡し暫し情報集めに働きかかる。

パスン パスン

一方お互い走り続ける倉井と銃を持った男。

お互い撃ち合うものの走っているため射程が合わず、全てかわして

いく。

< 亮太何してるのかな？ >

教室から見える校門付近を見ていると何かが走ってくる。

< りょ… 亮太?! >

だが、どこかおかしい。

銃を持った男は未だ仕留められずに学校まで爆走してきていた。
パスン

その光景を思わず黙って見ていたメイはハッと気づく。
ガララ

教室のドアが荒く開けられる。

「倉井か?!?!」

パスン

「うぐう… zzzz」

「あれ? 麻酔銃?」

そして、ハッと気が付く倉井。

「あ!… あの… そのスミマセン」

啞然としている生徒、教師にいきなり謝り、生徒や教師達も我が帰ったのか…

「あ… ああ」

ROUTE Q 号線

俗に学校乱銃事件といわれる今回の事件。

しかし、この直後にはまだ今回の事件の波が残っていた。

放課後

「あれ？メイの奴いねえなあ」

幼馴染とあり、帰る方向は勿論同じ。

しかし、いつもとは様子が違う。

自転車は事件の際、敵によって撃ち壊され、その上谷に突き落とされたため徒歩で帰るしかない倉井。

「はあ…新しいの買おうかな…」

とブツブツ心で呟く倉井は中間地点辺りにメイに似た人間が走っていくのを確認した。

ゴシゴシと目を擦りながら先刻の影を思い出す。

「メイ？」

その後ろをゾロゾロと何人かの男がついていく。

明らかに嫌な予感が漂う。

しかし、彼は臆することなく麻酔銃を取り出し、男たち同様ついていく。

「おいおい姉ちゃん。お前えの学校の生徒のせいでこっちは損したんだぜ？どうしてくれんだよ…」

昼間…？

まさか -

「おい！待てよ！」

見てられなくなった倉井は男達の目の前に現れた。

「亮太！」

そして男達は倉井の手元にある一丁の銃に目をやった。

「んだ？…それは黄天の武器じゃねえか…てめえか」

カチ。カチ。カチ。

「あ…あれ？」

「けっ弾切れかよ」

う…嘘だろ！？

「はっバ力だろ！？」

男達は一斉に特殊警棒を取り出した。

「ぐ！」

垂直に水平に…

警棒は倉井を襲う。

「がはっ！」

「…おい。あの女いいじゃねえか…」

「こいつは始末したし、あの女は…」

ニヤニヤと変態染みた顔をしている連中に倉井は一言言い捨てた。

「糞変態野郎」

「ああ？」

それを聞きつけた一人が再び警棒を振る。

バシリ！！

快音がなると同時に警棒は倉井の足によって完全に動きを止める。

その様子を遠目から見ていた影が呟く。

「…チャクラでも押されたか？」

「けっ！ここで駐在来ても厄介だ…お前の面。知ってるぜ？町議会議員のお孫さん…」

「…」

彼の祖父 倉井 信久は町議会議員議長というこの町の有名人。

そして、親に当たる 倉井 秀隆も中々の商売上手として有名だっ

たが数年前のこと。

連続辻きり魔が倉井夫妻を襲った。

その頃学校とは違う場所に預けられていた亮太は無事。

しかし、結果は二人とも死亡した。

そして、この事件は迷宮入りをしたまま、記憶として徐々に薄れていくのだ。

「…亮太。ありがと」

膝をついて泣きべそっているメイは上を向いて、倉井に感謝の意を示した。

「いって。ほら、手」

倉井は手を差し伸べ、起き上がらせる。

「男達がいたのは知ってたの…」

「…？」

「私、すつごく…す…ひつく…こわ…怖かったんだから…」

「…分かってるって。でも…そうして二人とも無事になんだし、な
！」

「無事じゃない！」

倉井の傷をさすりながら叫ぶ。

「え？」

「だって…ひく。亮太…傷だらけじゃん」

ぎゅ…

泣きじゃくるメイを倉井はそっと抱きしめた。

「！？」

「あー分かった分かった。もう泣くなって。」

「…」

「意外と亮太ってクールなんだね…あのさ、もし、よければ…その

付き合ってくれない？」

赤らめて告白をするメイ。

「…今はまだ答え出せねえから…でも、さ必ず出すから」
「うん…」

ROUGH 壹零号線

とりあえず全身いてえ…

やべえ…

これ死ぬかも…

てか。あいつ誰？

「初めまして。転校生 隅田 香です」

…やっべえ超タイ…一応、ね？

自慢じゃないけど前話で告られてるじゃん？

…？

誰だ死ねって言った奴。

しかも転校生隣かよ…

メイそつくりだなあ…

まあだからタイプなんだろうな

しっかし…隅田…隅田

隅田？

聞いたことありますな…

はっ！”隅田会”

まあ一種の893（禁句）です。
いや、それはないよ…うん。

時 同じくして 場所 とある別宅。

対談

「…この街についてえ？」

「はい…」

「噂では歴史的に重要なものがあるとか何とか…」

「あるとはいえる…」

「でわ、これで」

「おお…10万とは気が利くじゃないか 隅田さん」

「いえ、町長のほうですよ」

「黄天弾幕社の方はどうかね？」

「ええ…順調ですよ」

放課後

「おーい！倉井」

「あータイナカ」

見事退院できたタイナカ。

忌々しい事件ではあったものの彼等を成長させている。

てか、最近街おかしいよなあ

この前は撃たれるし、刺されるし。

ちよつといろいろ廻送中…

10秒後

終了

時 同じくして 場所 裏路地

「…ちよ、やめ」

パン！

時 同じくして 場所 事務所

「全く藤田も使えんし、うちのものも使えんし…」

「す…すみません」

「もついい。例の情報源をやつときゃ十分だ」

ROUTE 壱号線

「はあ？殺された？族の奴等が？」

最近夜中に徘徊されていると不評の連中”暴走族”
そのうちの一人昨夜銃殺されていたそうだ。

いつよいよ本格的に壊れてきたな…

最近町がおかしいと思っていたところだ。

何しろ2回も襲われるんだからな。

そりやまずいよ。

「今度は別の連中が殺されたらしい」

いろいろな噂がたつ。

しかし、嘘であろうと本当であろうととりあえず大量の人間が殺されたり、殺したりしているという事実はある。

一般人も車が撃たれたのだ、足を撃たれたのだの大騒ぎ。

学校にいる生徒を迎えにいく親もいない。

というか念を入れて学校にお泊りとか…

しかし、外からは銃声が絶えず聞こえんなあ…

一際目立って聴力良い倉井は外に響くか沸いた音に集中した。

深夜

依然止まない銃声。

寝静まった中そろそろと外に出ようとする影。

黄天弾幕社 本社付近の公園。

「武器の流出あんだだろ？」

「……」

「銃弾の痕跡やらタイプを確認したよ。間違いねえあんたの会社のモデルだ」

「……」

「黙ってねえで答えろや！！」

倉井はいつの間にか足技を繰り出した。

「……チャクラ！？」

「はあ？」

黄天 綾時は地面にめり込んでいる。

「はあ……はあ……」

【……！！】

携帯が夜の田舎に響く。

タイナカ ケイスケ

「どおした？綾時なら潰したぞ？」

「違うんだ！綾時さんは……あ！」

「ハロー。クロー・リラちゃん」

「！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977s/>

ド田舎鎮魂歌

2011年5月7日23時52分発行